國學院大學学術情報リポジトリ

Death and Rebirth in the Kojiki

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 胡, 暁媛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001579

『古事記』における「死と再生」について

Death and Rebirth in the *Kojiki*

胡暁媛

キーワード：『古事記』　死と再生　イザナギ・イザナミ　オオナムチ　スサノオ
关键词：《古事记》　死而再生　伊耶那岐和伊耶那美　大穴牟迟　须佐之男命

要旨

『古事記』では、生きている神が、一度死んだ後再生するという神話が多く記載されている。一方、生きている神が死んでから、他の新しい「モノ」がその死体から誕生するという型の「死と再生」の神話も存在している。

『古事記』における「死と再生」の神話に対する研究を通して、「二重性格」を持っているスサノオは自身の「死と再生」を経験せず、スサノオは不可欠重要な転換装置として、「死と再生」の転換過程において、「穀物起源の神話」をはじめ、様々な場面で大きな力を発揮し、『古事記』における唯一「死と再生」の転換を司る能力を備えている神なのである。そして、その能力はスサノオの自身の成長あるいは神知の開化に伴い、向上していく。スサノオは農耕社会の破壊者、神を殺したという悪神から、高天原が担っている「生成力」を実践する生産者と高天原的秩序を守る者になり、のみならず、地上世界を王化する使者、さらに高天原的秩序と意志に従う王化継承者の成育者になった。

摘要

《古事记》中记载着许多，活着的神一度死去后又重生这样的的神话。另一方面，也有活着的神死了之后，从他的尸体中又诞生出其他新的物体这样的“死而再生”的神话。

通过对《古事记》中“死而再生”神话的研究，可知，具有“双重性格”的须佐之男命，其自己虽未经历过“死而再生”，但是作为不可或缺的重要的“转换装置”，他在以“谷物起源神话”为首的“生死转换”过程中，发挥着重要的作用、成为《古事记》中唯一拥有掌控“死而再生”能力的神。同时，这一能力也随着须佐之男命的成长和神智的开化不断提高。须佐之男命从农耕社会的破坏者，杀神的“恶神”，转变为实践高天原所承担的“生成之力”的生产者，高天原秩序的守护者，以及王化地上世界的使者和王化继承者的培养者。

はじめに

『古事記』では、生きている神が、一度死んだ後再生するという神話が多く記載されている。一方、生きている神が死んでから、他の新しい「モノ」がその死体から誕生するという型の「死と再生」の神話も存在している。

本論文で言う死と生は、実際の生理的なものとは限らず、象徴的な死とそれに続く再生のことも意味する。すなわち、食（日食、月食）や神格変化などで象徴される場合があるだけでなく、九死に一生を得る場面も含まれる。

なお、本論文において引用する『古事記』の書き下し文は、特に断らない限り山口佳紀・神野志隆光校注『新編日本古典文学全集１―古事記』（小学館 1997）による。また、本論文で神名に言及する場合は、便宜上『古事記』における神名の片仮名表記で統一する。

先行研究では、「死」と「生」を別々に研究する成果があるものの、「死と再生」の転換を中心とする研究が少ない。さらに、「死と再生」の舞台裏におけるプロモーター、あるいはそれとかかわっている神々の行為に着目するものはごくわずかである。したがって、本論文は、『古事記』における「死と再生」の神話に焦点をあて、それと関連する神の行為についての考察を通して、神の能力と違いを究明することを目的とする。

『古事記』において、「死と再生」に関する神話は、表１に示すように、12話ある。本論文では、これらの神話を再生者[(1)]によって、イザナギとイザナミに関する「死と再生」（①～④）、オオナムチと神武天皇に関する「死と再生」（⑧～⑩と⑫）、およびスサノオ（⑤～⑦と⑪）に関する「死と再生」という三章を分けて、考察する。

表１　『古事記』における「死と再生」の神話

番号	条	死 → 再生	殺害者	再生者
①	国生み・神生み	イザナミ → 火の神	火の神	×
②		イザナミの排泄物 → 3組の神		
③	火の神の死	火の神の血と死体 → 16の神	イザナギ	

(1) 本論文では「再生させる者」を「再生者」と称する。

④	黄泉の国	イザナミ → ヨモツオオカミ	火の神	×
⑤	天の石屋	太陽神：消失 → 顕現	スサノオ	八百万神
⑥	穀物起源	オオゲツヒメ → 五穀、蚕	スサノオ	
⑦	八俣の大蛇退治	ヤマタノオロチ → クサナギノタチ	スサノオ	
⑧	稲羽の素兎	裸の兎 → 癒える兎	八十神	オオナムチ
⑨	八十神の迫害	オオナムチ →（麗壮夫）	八十神	カムムスヒ
⑩		オオナムチ → オオナムチ	八十神	御祖の命
⑪	根の堅州国訪問	オオナムチ → オオクニヌシ	スサノオ	
⑫	神武天皇	正気を失った → 覚め起きる	大熊	御刀

1．イザナギ・イザナミに関する「死と再生」

天地初発の時に神世七代の最後に、イザナギとイザナミが誕生した。その直後に、天つ神は「是のただよへる国を修理ひ固め成せ。（p.31）と二神に国土の「修理固成」の使命を申し渡した。そこで、イザナギとイザナミは結婚して協働して、国生み・神生みを始めていく。

（1）イザナギ・イザナミに関する創造神話

表２は『古事記』において、イザナギ・イザナミに関するすべての「死」と「生」を総括するものである。

表２　『古事記』におけるイザナギ・イザナミに関する「死」と「生」

番号	条	死	生
①	初発の神々	×	神世七代（ギ・ミ二神を含む）
②	淤能碁呂島	×	オノゴロ島
③	神の結婚	×	ヒルコ、淡島
④	国生み・神生み	×	大八島＋他の６島＋33の神
⑤	伊邪那美命の死	イザナミ	火の神
⑥			イザナミの排泄物 → ６つの神
⑦		×	イザナギの御涙 → ナキサワメ
⑧	火の神の死	火の神	血 → ８つの神 死体 → ８つの神
⑨	黄泉の国	イザナミ	死体 → 八雷神
⑩			ヨモツオオカミ
⑪	みぞぎ	×	23の神＋三貴子

まず、①～④の項は天地開闢の時に、イザナギ・イザナミの誕生とこの二神による国生み・神生みを物語るものである。また、⑦と⑪の過程は似ている。⑦の項については、愛妻を失ったイザナギは、

> 故爾くして、伊邪那岐命の詔はく、「愛しき我がなに妹の命や、子の一つ木に易らむと謂ふや」とのりたまひて、乃ち御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひて哭きし時に、御涙に成れる神は、香山の畝尾の木本に坐す、名は泣沢女神ぞ。（pp. 42-43）

というように、身体全体にまんべんなく腹這って泣くのである。そうすると、その涙から、ナキサワメ（泣沢女神）が生まれた。

また⑪については、黄泉国から帰還したイザナギは、身に付く穢れを除去するために、

> 竺紫の日向の橘の小門のあはき原に到り坐して、禊祓しき。……是に、左の御目を洗ひし時に、成れる神の名は、天照大御神。次に、右の御目を洗ひし時に、成れる神の名は、月読命。次に、御鼻を洗ひし時に、成れる神の名は、建速須佐之男命。（pp. 49, 53）

というように「みそぎ」を行うと、様々な神が誕生してきた。

そのため、イザナギの「みそぎ」と泣沢女神の誕生は、単なる「誕生」という行為で、延々と続く「神生み」の一環であると思われる。以上の五項は「生」、あるいはより正確に言うと「誕生」としかかかわっていない。

(2) イザナミの「神避り」に関する「死と再生」

『古事記』において、「神生み」の最後に、

> 故、伊邪那美神は、火の神を生みしに因りて、遂に神避り坐しき。（p. 41）

と記述されている。イザナミは火を司る神を生まれた時に、彼に火傷され、死んでしまった。そのため、⑤の過程は「死と再生」ではなく、火の神の「誕生」によってイザナミが「死んだ」という「生」による「死」であると思われる。

また、イザナミが死に瀕した際に、その排泄物から三組の対偶神を化生した。ここで注意すべきは、その時、イザナミはまだ死んでいないのである。そのため、⑥の化生過程も死体から誕生するという型の「死と再生」ではない。

その後で、「神避る」妻を追いかけるために、黄泉国を訪問するイザナギは、

> 爾しくて、殿より戸を騰ぢ出で向へし時に、伊邪那岐命の語りて詔ひしく、「愛しき我がなに妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟らず。故、還るべし」とのりたまひき。爾くして、伊邪那美命の答へて白さく、「悔しきかも、速く来ねば、吾は黄泉戸喫を為る。然れども、愛しき我がなせの命の入り来坐せる之事、恐きが故ぶ、還らむと欲ふ。且く黄泉神と相論はむ。我を視ること莫れ」と、如此白して、其の殿の内に還り入る間、甚久しくして、待つこと難し。故、左の御みづらにに刺せる湯津々間櫛の男柱を一箇取り闕きて、一つ火を燭して入り見し時に、うじたかれころろきて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には析雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、幷せて八くさの雷の神、成り居りき。（pp. 45-46）

というイザナミの死体から「八雷神」が生じている様子に驚かされた。イザナミは火の神によって死んだから、その「殺害者」は火の神に違いない。また文脈から、イザナミは黄泉国に入る前に、その死体には「八雷神」をまだ化生してこないことが明らかである。続いて、イザナミは黄泉国に入って、その世界の食べ物（黄泉戸喫）を食べたことがある。その後で、イザナギは恐ろしい場面を覗いた。すなわち、「八雷神」はイザナミが黄泉国に入った後、ようやく女神の体から化生していくのである。そのため、「八雷神」を誕生させる者は火の神ではなく、黄泉国に属すべきだと思われる。それは「黄泉戸喫」であるかもしれず、同じく黄泉国の環境でもあるかもしれない。つまり、⑨の「死と再生」の過程における「殺害者」と「再生者」は同じ者ではない。

続いて、⑩の項はイザナミが黄泉国に入ったあと、ヨモツオオカミになったということである。前述したように、イザナミを死なせるという「殺害者」は火の神である。しかし、その「再生者」については、「八雷神」の情況と同じところがある。『古事記』には、

> 事戸を度す時に、伊邪那美命の言ひしく、「愛しき我がなせの命、如此の為ば、汝が国の人草を、一日に千頭絞り殺さむ」といひき。爾くして、伊邪那岐命の詔ひしく、「愛しき我がなに妹の命、汝然為ば、吾一日に千五百の産屋を立てむ。」とのりたまひき。是を以て、一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生るるぞ。故、其の伊邪那美神命を号けて黄泉津大神と謂ふ。（pp.41、45、49）

という記述がある。これによって、イザナミは黄泉国に入ると、すぐヨモツオオカミになったのではなく、「死」の呪術によって、やっとヨモツオオカミと呼ばれることがわかる。そのため、イザナミの死体を覗き、また女神の怒りを引き起こし、人間の「死」の呪術をさせるイザナギが、イザナミがヨモツオオカミになさせる「再生者」であるべきだと思われる。つまり、⑩のイザナミ自身の「死と再生」の過程における「殺害者」と「再生者」も別々になる。

（3）火の神に関する「死と再生」

愛妻の死によって怒ったイザナギは、トツカノツルギで火の神の首を斬ったというように、『古事記』の話が発展していく。

> 是に、伊邪那岐命、御佩かしせる十拳剣を抜きて、其の子迦具土神の頸を斬りき。爾くして、其の御刀の前に著ける血、湯津石村に走り就きて、成れる神の名は、石析神。次に、根析神。次に、石筒之男神。次に、御刀の本に著ける血も亦、湯津石村に走り就きて、成れる神の名は、甕速日神。次に、樋速日神。次に、建御雷之男神。亦の名は、建布都神。亦の名は、豊布都神。次に、御刀の手上に集まれる血、手俣より漏き出でて、成れる神の名は、闇淤加美神。次に、闇御津羽神。

上の件の、石析神より以下、闇御津羽神より以前、幷せて八はしら神は、御刀に因りて生める神ぞ。
殺さえし迦具土神の頭に成れる神の名は、正鹿山上津見神。次に、胸に成れる神の名は、淤縢山津見神。次に、腹に成れる神の名は、奥山上津見神。次に、陰に成れる神の名は、闇山津見神。次に、左の手に成れる神の名は、志芸山津見神。次に、右の手に成れる神の名は、羽山津見神。次に、左の足に成れる神の名は、原山津見神。次に、右の足に成れる神の名は、戸山津見神。故、斬れる刀の名は、天之尾羽張と謂ふ。亦の名は、伊都之尾羽張と謂ふ。（pp.43-45）

この記述によると、火の神の首を切った時にほとばしった血とその死体から、合わせて16の神が生成する。言うまでもなく、ここで、イザナギは火の神を殺した「殺害者」の役を演じる。その「再生者」については、以上の記述から、血から成った神が「御刀によって生める神」であることがわかる。すなわち、この「御刀」は火の神の血から成った８の神々の「再生者」である。後の死体から成った神については説明がないが、同じ「御刀」による「死と再生」である上に、ほかの参加者がないから、その「再生者」も同様であると思われる。したがって、⑧の過程において、「殺害者」と「再生者」は同じ者でもない。

以上をまとめてみたい。イザナギとイザナミに関する「死と再生」の過程において、①のイザナギ・イザナミの誕生、②～④の国生み・神生み、および⑦の泣沢女神の誕生と、⑪のイザナギの「みそぎ」による神々の「成（なれる）」のように、「生」としかかわっていない「誕生」の例がある。それに対して、「死」と「生」の両方を関係する⑤の火の神の誕生によるイザナミの「神避り」は「生」による「死」もある。⑥のイザナミの排泄物からの化生過程では、イザナミがだた死に瀕し、まだ死んでいないから、「死と再生」の神話ではない。また、⑧の火の神の死とその死体の化生と、⑨のイザナミの死体から化生した「八雷神」、および⑩のイザナミの神格変化では、「殺害者」と「再生者」は同じ者ではない。つまり、前述した神々のいずれも「死と再生」の転換を司る能力を持っていない。

２．オオナムチと神武天皇に関する「死と再生」

本章では、主にオオナムチと神武天皇に関する「死と再生」の神話（表１の⑧～⑩と⑫）を中心に、それと関連する神の行為と能力を研究し続きたい。

（1）オオナムチに関する「死と再生」

『古事記』では、オオクニヌシは少年時代にオオナムチと呼ばれ、様々な試練を経って、三つの「死と再生」を繰り返す度に、次第に成長し卓越したオオクニヌシノカミとなっていく（表１の⑨～⑪）。その過程で、八十神と一緒に稲羽のヤカミヒメに求婚の旅に出かけた途中で、オオナムチはまた稲羽の白兎の「死と再生」に遭遇した（表１の⑧）。これもオオナムチの成長の一部であったと見なすことができるであろう。その中で、⑪の物語において、オオナムチの「死と再生」はスサノオと大きくかかわっているため、次の章で検討する。

①　稲羽の白兎の「死と再生」

『古事記』では、オオナムチの求婚譚の前半に「稲羽の白兎」が登場した。

> 是に、気多之前に到りし時に、裸の菟、伏せりき。……大穴牟遅神、其の菟を見て言ひしく、「何の由にか汝が泣き伏せる」といひき。菟が答へて言ひしく、「……最も端に伏せりしわに、我を捕へて、悉く我が衣服を剥ぎき。此に因りて泣き患へしかば、先づ行きし八十神の命以て、『海塩を浴み、風に当りて伏せれ』とのらしき。故、教の如く為しかば、我が身、悉く傷れぬ」といひき。是に、大穴牟遅神、其の菟に教へて告らししく、「今急やけく此の水門に往き、水を以て汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲黄を取り、敷き散して其の上に輾転ばば、汝が身、本の膚の如く必ず差えむ」とのらしき。故、教の如く為しに、其の身、本の如し。此、稲羽の素菟ぞ、今には菟神と謂ふ。故、其の菟、大穴牟遅神に白ししく、「此の八十神は、必ず八上比売を得じ。袋を負へども、汝が命、獲む」といひき。（pp.75-79）

この話で主人公の兎はワニに毛皮をすっかり剥ぎ取られたあと、八十神の意

地悪によって文字通りの「死」の苦しみに遭わせられた。その後で、オオナムチの教えに従うことで、まさに脱皮し「死ぬ」ような思いをした上で、皮膚を更新され、「再生」したと見なすことができる。それだけでなく、兎はこのように脱皮による「再生」を遂げることで、「今には菟神と謂ふ」と言われているように、神格を持つようになった。そして、治った兎はオオナムチに「あなたこそヤカミヒメを得ることができる」と予言した。

この過程において、八十神はワニと共に兎の「殺害者」と見なすことができる。これに対して、オオナムチは兎を「再生」させるだけでなく、神格への成長を達成させた。しかし、ここで、「殺害者」と「再生者」の役はそれぞれ異なる神によって演じられるため、オオナムチは「再生」させる能力を持っているにもかかわらず、八十神と同様に、一人で「死と再生」の転換を司らない。

②　オオナムチの成長（前半部分－八十神の迫害）

白兎の予言通り、ヤカミヒメがオオナムチを結婚の相手として選んだ。これによってオオナムチを憎悪した八十神たちは、彼に対して様々な迫害を加えた。

その最初の迫害で、八十神が山の上から真赤に焼いた大石を転がし落とし、オオナムチはそれに焼かれて全身に大火傷を負って死んでしまった。そのことを知った母神は、カムムスヒに助けを求めた。最後、派遣された女神の助けによって、オオナムチの火傷はすつかり癒え、復活した上に、「麗しき壮夫」となった。そのことは、『古事記』にこう記されている。

> 故爾くして、八十神、忿りて大穴牟遅神を殺さむ欲ひ、共に議りて、伯伎国の手間の山本に至りて云はく、「赤き猪、此の山に在り。故、われ、共に追ひ下らば、汝、待ち取れ。若し待ち取らずは、必じ汝を殺さむ」と、云ひて、火を以て猪に似たる大きな石を焼きて、転ばし落しき。爾くして、追ひ下り、取る時に、即ち其の石に焼き著けらえて死にき。爾くして、其の御祖の命、哭き患へて、天に参ゐ上り神産巣日之命に請しし時に、乃ち蚶貝比売と蛤貝比売とを遣して、作り活けしめき。爾くして、蚶貝比売きさげ集めて、蛤貝比売待ち承けて、母の乳汁を塗りしかば、麗しき壮夫と成りて、出で遊び行きき。（p. 79）

この話で、オオナムチを「死」なせた「殺害者」は八十神である。その後、母神やカムムスヒ、および派遣された二つの女神というさまざまな神は、オオナムチを「再生」させる役割を果たしている。

この事件のあとで、オオナムチが生き返ったのを知った八十神たちは、彼をまた騙して山の中へ連れ、大きな木の中に入らせ、その後で楔を抜いた。そのために、オオナムチは木の中で挟まれて死んでしまった。このときもまた母神が、いなくなった息子を泣きながら探してまわり、見つけると木をさいて中から取り出し、生き返らせた。そのことは、『古事記』にこう記されている。

> 是に、八十神見て、且、欺きて率て入りて、大きな樹を切り伏せ、矢を茹めて其の木を打ち立て、其の中に入らしめて、即ち其の氷目矢を打ち離ちて、拷ち殺しき。爾くして、亦、其の御祖の命、哭きつつ求めしかば、見ること得て、即ち其の木を析きて取り出だして活け……（pp. 80-81）

この話の中で、オオナムチは木の幹の内部に包まれたような状態になってまた「死」んで、その後母神によって、中から取り出されて「再生」したというのである。八十神は再びオオナムチの「殺害者」という役を演じ、これに対して、今回の「再生者」は彼の母神である。

ここから、オオナムチの二つの「死と再生」の過程で、彼を「再生」させる人物は、彼を「死」なせた八十神ではないことが明らかである。すなわち、オオナムチの「死と再生」を転換させる媒介者は一人に止まらない。そのため、これらの神々も「死と再生」の転換を司る能力を備えていないと思われる。

(2) 神武天皇に関する「死と再生」

『古事記』において、日本初代天皇カムヤマトイワレビコ（のちの神武天皇）は戦争に出かけた途中で、

> 故、神倭伊波礼毘古命、其地より廻り幸して、熊野の村に到りし時に、大き熊、髣かに出で入りて、即ち失せき。爾くして、神倭伊波礼毘古命、倏忽にをえ為、及、御軍、皆をえして伏しき。此の時に、熊野の高倉下、一

ふりの横刀を持ちて、天つ神御子の伏せる地に到りて而献りし時に、天つ神御子、即ち寤め起きて、詔ひしく、「長く寝ねつるかも」とのりたまひき。故、其の横刀を受け取りし時に、其の熊野の山の荒ぶる神、自ら皆切り仆さえき。爾くして、其の惑ひ伏せる御軍、悉く寤め起きき。（pp. 145-146）

という奇妙な事に出会った記述がある。つまり、イワレビコは熊野の村に着いた時に、大きな熊が草木の中から出たり入ったりして、すぐに姿を消した。すると、イワレビコは急に気を失って、また、彼が率いていた軍隊もみな気を失って倒れてしまった。この時、熊野のタカクラジが、一振りの太刀を持って、イワレビコの倒れている所に来て、その横刀を献上した。すると、気を失って倒れていたイワレビコと軍隊が目覚めた。

この物語では、その大きい熊は神武天皇に「死」らせた「殺害者」である。それに対して、ミルチャ・エリアーデの説によると、「正気を失った神武天皇は神剣の霊威によって蘇るのであるが、それは「死と再生」を意味する」[(2)]のである。そのため、神剣は天皇を蘇らせる「再生者」と見なすことができる。イワレビコの「死と再生」の過程で、その「殺害者」と「再生者」は依然として同じ者ではないのである。

本章をまとめると、オオナムチと神武天皇に関する「死と再生」において、それとかかわっている神の中で、「死と再生」の転換を司る者は一人もない。

3．スサノオに関する「死と生」

高天原の神々において、スサノオは特別な存在である。スサノオは三貴子[(3)]の一員として、独りイザナギの命に背き、種々の罪を犯して災いに満ちた世界を招いた。しかし、出雲に降ったスサノオは一転して、ヤマタノオロチを退治し、英雄になった。なぜスサノオにはこのような大きな変化があるか、その過

(2) アンダソヴァ・マラル。古事記におけるタカミムスヒ・カムムスヒの考察：「死と再生」の視点から。佛教大学大学院紀要。文学研究科篇 39、2001年、58頁。
(3)『古事記』において、黄泉国から帰ってきたイザナギが穢れを落とした時に、最後に生まれ落ちたアマテラス、ツクヨミとスサノオという三柱の神々は、三貴子と呼ばれている。

程でスサノオは何をしたのかについて、表１における⑤「アマテラスの岩屋戸隠れ」、⑥「穀物起源」、⑦「ヤマタノオロチ退治」、および⑪「オオナムチの成長」という四つの「死と再生」の物語を通して、考察を試みたい。

（1）アマテラスの岩屋戸隠れ

スサノオは父から定められた支配地を治めず、母の根国へ行きたいため、怒った父に追放された。その後で、彼はアマテラスにいとまごいをするのを口実にして、高天原に参上し、数々の乱暴を働いた。ついにアマテラスはそれを恐れて天岩屋戸に隠れ、世の中は光を失い、悪霊が満ち、災いが起こった。

> 天照大御神の営田のあを離ち、其の溝を埋み、亦、其の、大嘗を聞し看す殿に屎まり散しき。……天照大御神、忌服屋に坐して、神御衣を織らしめし時に、其の服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剥ぎて、墮し入れたる時に、天の服織女、見驚きて、梭に陰上を衝きて死にき。故是に、天照大御神、見畏み、天の石屋の戸を開きて、刺しこもり坐しき。爾くして、高天原皆暗く、葦原中国悉く闇し。此に因りて常夜往ききき。是に、万の神の声は、狭蠅なす満ち、万の妖、悉く発りき。（p. 63）

『古事記』の記述によると、「アマテラスの岩屋戸隠れ」は主に、

a．スサノオの乱暴に驚いたアマテラスが天岩屋戸に隠れ、天地が闇になる。
b．隠れたアマテラスが様々な呪儀によって天岩屋戸から出て、天地が再び明るくなる。

という二つの本筋からなる。ここで、アマテラスの退場は単なる神の隠れではなく、アマテラスの不在による闇と、再出現による明るい状態から、アマテラスが光の根源であることが明らかである。そして、本居宣長によって、「天照」とは「天ニ坐々テ照リ賜フ意」[(4)]のである。すなわち、アマテラスとは天にあっ

(4) 本居宣長．古事記傳　巻七．清栄社，1980年，18頁。

て我々を照らす太陽の神である。このように、天岩屋戸に隠れたアマテラスはその体は死んでいないが、この行動によって全世界が闇になり、そしてこの状態は女神の再登場まで続くということから、アマテラスの太陽神としての最も重要な役割がなくなったわけである。そのため、この時のアマテラスは「死」あるいは「仮死状態」に当たると思われる。

その後、八百万の神々は世界に光と秩序を取り戻すために、様々な呪儀を行い、ようやくアマテラスを天岩屋戸から連れ出し、天地が再び明るくなり、秩序のある社会に戻った。すなわち、一連の出来事の諸問題は、アマテラスが天岩屋戸から出ることによってすべて解決した。先に述べた考え方に従えば、これは太陽神たるアマテラスが「死」、あるいは「仮死状態」から「再生」し、その神力を回復したことを意味すると思われる。つまり、この「アマテラスの岩屋戸隠れ」の場面は、太陽神であるアマテラスの「死」と呪儀による「再生」ととらえるべきだと思われる。

以上の分析によって、アマテラスの「死と再生」の過程における「殺害者」と「再生者」も明らかになる。乱暴を働くスサノオはアマテラスを天岩屋戸に追い込み、「仮死状態」に入らせる「殺害者」であり、様々な呪儀を行った八百万の神々はアマテラスを天岩屋戸から連れ出す「再生者」である。従って、ここでの「殺害者」と「再生者」は同じ者ではなく、スサノオは「生成力」をまだ身につけていないため、この「死と再生」の過程における「死」の部分にしか参加せず、「再生」させる能力は備えていない。つまり、自身の能力が限られ、その時のスサノオは「死と再生」の転換を司っていない。

乱暴の結果として、スサノオはたくさんの品物を没収され、鬚が切られ、手足の爪さえも抜かれるという「祓」をさせられた上に、高天原から追放された。熊谷保孝氏によると、この鬚や手足の爪は、「私」の一部である。このように私的なものを「祓」によって高天原に差し出し、スサノオは「私」を捨てて高天原に帰依・服属していく神に生まれ変わる[5]。

(5) 熊谷保孝。日本上代の生死観。溪水社、2009年、124頁。

（2）穀物起源

『古事記』において、次の「穀物起源」の神話は、スサノオが「祓」を受けた後、出雲に赴く前に起こった出来事として物語られている。

> 又、食物を大気都比売神に乞ひき。爾くして、大気都比売、鼻・口と尻とより種々の味物を取り出だして、種々に作り具へて進る時に、速須佐之男命、其の態を立ち伺ひ、穢汚して奉進ると為ひて、乃ち其の大宜津比売神を殺しき。故、殺さえし神の身に生りし物は、頭に蚕生り、二つの目に稲種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に大豆生りき。故是に、神産巣日御祖命、茲の成れる種を取らしめき。（pp. 67-69）

高天原から追放されたスサノオはオオゲツヒメに食事を求めた。スサノオは女神が鼻や口や尻から取り出す汚らわしい物を自分に奉るつもりと思って、オオゲツヒメを切り殺した。すると、その死体から蚕と五穀が生じた。

この神話において、スサノオはオオゲツヒメを殺したが、その行為があってこそ、穀物の種は女神の死体から「誕生」してくることが可能になる。そのため、点から見れば、スサノオはオオゲツヒメの「殺害者」であると同時に、穀物の「再生者」でもある。ここで、スサノオは高天原から「祓」を科された後、はじめて高天原が担っている「生成力」を身につけるようになった。

そして、今回の「死と再生」の過程において、はじめて「殺害者」と「再生者」の役を同じ者が演じる情況が出てきて、スサノオは一人で「死と再生」の転換を司るようになる。すなわち、スサノオは『古事記』における唯一「死と再生」の転換を司る能力を備えている神になる。スサノオの「生成力」と「死と再生」の転換を司る能力がこの時に初めて発揮され、「穀物起源」は彼の生産的な活動の第一歩なのである。

更に、「天岩屋戸」の条におけるスサノオは農耕社会の破壊者であり、アマテラスを天岩屋戸に追い込んだといういわば殺害者でしかなかった。これに対して、今回のスサノオはオオゲツヒメを殺害したという悪行があるが、結果として穀物の種を獲得したという功労もある。そのため、同じく殺害であっても、「アマテラスの岩屋戸隠れ」の条における単なる反秩序的な悪行と違い、今回

の行為は功罪相半ばすると言えるであろう。つまり、スサノオは高天原の破壊者から、高天原が担っている「生成力」の実践者になっていく。

(3) ヤマタノオロチ退治

高天原から追放されたスサノオは根国に旅立つ途中で出雲に降った。出雲を舞台とするスサノオは、高天原を舞台とする時と、まったく相反する二面を示している。『古事記』では乱行を働いた悪神とするスサノオが、英雄的善神に変化するエピソード「ヤマタノオロチ退治」が次のように語られている。

> 爾くして、速須佐之男命、其の御佩かしせる十拳の剣を抜き、其の蛇を切り散ししかば、肥河、血に変りて流れき。故、其の中の尾を切りし時に、御刀の刃、毀れき。爾くして、怪しと思ひ、御刀の前を以て刺し割きて見れば、つむ羽の大刀在り。故、此の大刀を取り、異しき物と思ひて、天照大御神に白し上げき。是は、草那芸之大刀ぞ。(pp. 71-72)

すなわち、スサノオは出雲では、ヤマタノオロチを退治した。そして、大蛇の尾の中からクサナギノタチを得、アマテラスに献上した。このクサナギノタチは天孫降臨の時、天孫に授けられた、いわゆる三種の神器の一つである。

この物語で、ヤマタノオロチを殺したスサノオは、同時にクサナギノタチを大蛇の尾から「再生」させる者である。大蛇の「死」を太刀の「生」に換えることができたのは、スサノオが「死と再生」の転換を司るためである。そして、出雲の代表者となるスサノオが、王権を象徴する太刀を高天原の代表者とするアマテラスに献上したということは、出雲の高天原に対する服属宣誓の意味を持っている[(6)]。出雲に存在した原始的で無秩序なものの象徴としてのヤマタノオロチを退治し、稲田や生命を守り、太刀を献上したことのいずれもスサノオの功績となっている。ヤマタノオロチの「死」とクサナギノタチの「誕生」は、出雲が高天原の王権によって王化されたことを意味するものに他ならない。

---

(6) 松本直樹。『古事記』の穀物起源神話について――『古事記』的展開の国作りへ。国文学研究 116、1995年、5頁。

無秩序で穢れに満ちた出雲を高天原的な秩序ある世界へと王化することは、スサノオが「死と再生」の転換を司ることによって引き起こした重要な変化であると思われる。それ以降のスサノオは高天原が担っている「生成力」を実践する生産者であるだけでなく、高天原的秩序を守る者、地上世界を王化する使者でもある。これはスサノオが成長した一つの証しであると思われる。

（4）オオナムチの成長（後半部分ーオオクニヌシになる試練）

前章で言及されたオオナムチは兄弟の迫害に苦しんで、しかたなくスサノオのいる根国[7]に逃れた。オオナムチはスサノオに会うと、すぐに様々な試練が与えられる。

> 即ち喚し入れて、其の蛇の室に寝ねしめき。是に、其の妻須勢理毘売命、蛇のひれを以て其の夫に授けて云ひしく、「其の蛇咋はむとせば、此のひれを以て三たび挙りて撥へ」といひき。故、教の如くせしかば、蛇、自ら静まりき。故、平らけく寝ねて出でき。亦、来し日の夜は、呉公と蜂の室に入れき。亦、呉公と蜂とのひれを授けて教ふること、先の如し。故、平らけく出でき。亦、鳴鏑を大き野の中に射入れて、其の矢を採らしめき。故、其の野に入りし時に、即ち火を以て其の野を廻り焼きき。是に、出でむ所を知らずありし間に、鼠、来て云ひしく、「内はほらほら、外はすぶすぶ」と、如此言ひき。故、其処を蹈みしかば、落ちて隠り入りし間に、火は焼え過ぎにき。爾くして、其の鼠、其の鳴鏑を咋ひ持ちて出で来き、奉りき。（pp. 81-83）

最初の二晩に、スサノオはオオナムチをそれぞれ蛇の室と、ムカデと蜂の室に寝かせたが、スセリヒメが予めそれらの「ヒレ」[8]を授けていたので、難を逃れた。次に、スサノオはオオナムチを野原の中に射込んだ鳴鏑を拾わせた。

---

(7) スサノオはイザナギから定められた支配地を治めず、母の根国へ行きたいため、怒った父に根国に追放されてしまった。その途中で、出雲に降ったことがあるが、最後の目的地は根国である。

(8)「ヒレ」とは、はう虫、飛ぶ虫を祓い、その害を受けたときはそれを癒すものである。

ところが、オオナムチがその野に入ると、スサノオは火を放って野原を焼き、オオナムチが囲まれた。その時、鼠が現れ、逃れられなくて困っているオオナムチを鼠の穴に隠し、また、矢を持ってきてくれた。

『古事記』において、この間のスサノオとスセリヒメについては、

> 是に、其の妻須世理毘売は、喪の具を持ちて哭き来るに、其の父の大神は、已に死に訖りぬ思ひて、其の野に出で立ちき。（p. 83）

と記している。すなわち、この放火によって、スセリヒメはオオナムチが死んだものと思い込み、葬式の準備をしながら泣き悲しんでいた。スサノオもそうと思い込んでいた。この二人についての描写から、この野原の放火は、「死」に値するほどの意味をもっていたことがわかる。しかし、意外にも、オオナムチは鳴鏑を手に持って帰ってきて、またしても九死に一生を得た。従って、オオナムチはここでもう一回の「死と再生」を経験したと思われる。

しかし、試練はまだ終わらず、『古事記』の話は以下のように続いていく。

> 爾くして、其の矢を持ちて奉りし時に、家に率て入りて、八田間の大室に喚し入れて、其の頭の虱を取らしめき。故爾くして、其の頭を見れば、呉公、多た在り。是に、其の妻、むくの木の実と赤い土と取りて、其の夫に授けき。故、其の木の実を咋ひ破り赤き土を含み、唾き出ししかば、其の大神、呉公を咋ひ破り唾き出すと以為ひて、心に愛しと思ひて、寝ねき。（p. 83）

オオナムチはまたスサノオの頭にいる虱を取ることを命じられた。しかし、それは虱ではなく、ムカデであった。この時、オオナムチはスセリヒメの授けた椋の実と赤土を唾と共に吐き出していた。スサノオはそれがムカデを食べながら吐き出しているものと勘違いし、「心に愛しと思ひて」眠ってしまった。

熊谷保孝氏によると、スサノオがオオナムチのことを心に愛しと思ったということは、これまでオオナムチに向けられた一連の苦難が、八十神たちによる「いじめ」とまったく違って、スサノオのそれはオオナムチをより強力な男子

に育て、オオクニヌシとするための「試練」であった[9]。

八十神の迫害によって、オオナムチは体が小さく、力も弱い者から、「麗しき壮夫」として「再生」するということは、肉体的な成長である。一方、スサノオから厳しい試練に遭わせられることによって、オオナムチが八十神の迫害に対してまったく無力であった普通の者から、スサノオから与えられた武器で彼らをたちまちのうちに追討し、国土の王になって国作りに従事できるオオクニヌシノカミという偉大な神格に成長していくことは、精神的な成長であると思われる。多くの研究者によってすでに指摘されてきているように、オオナムチのいくつかの「死と再生」は成長のための試練、すなわち成年式の一部である[10]。成年式は、「一人前の男女になったことを社会的に認められる式」[11]のことである。そのため、オオナムチからオオクニヌシノカミへの変化は、「国の主」になるための成年式的な「死と再生」であると言えるであろう。

スサノオはオオナムチを成長させた最も重要な援助者であり、今回の「死と再生」は彼の「生成力」と「死と再生」の転換を司る能力を三度目に発揮してもたらした成果である。そして、スサノオがオオクニヌシという「葦原中国の主」を育てたというのは、彼が高天原からの王化の使者として、葦原中国を王化することを意味していると思われる。さらに、以前の一回限りの王化と違っているのは、今回、彼は自分の継承者を育成し、葦原中国の長期的な安定と高天原に対する服従に永続の保障を提供したということである。これは、スサノオの最も重要な功績であると言えるであろう。

このように、スサノオの「死と再生」の転換を司る能力は、穀物などのような生存するために必要な品を創造できるだけではなく、地上世界を王化し、さらに自分の王化能力を継承する「国の主」を育成することもできる。そこから、スサノオは単なる高天原の王化の使者から、高天原的秩序と意志に従う王化継承者の成育者になる。これはスサノオの能力が成長した証拠である。

---

(9) 熊谷保孝。日本上代の生死観。溪水社、2009年、278頁。
(10) 例えば：松前健。日本神話の形成。塙書房、1970年、253-290頁などを参照。
(11) 民俗学研究所。民俗学辞典。東京堂、1951年、311頁。

(5) スサノオの成長

「死と再生」の過程での行為に対する描写から、スサノオは「二重性格」を持っている神であることがわかる。『古事記』神話の前半において、スサノオは三貴子の一員として、独り高天原の秩序に反抗し、種々の罪を犯して災いに満ちた世界を招いた「悪神」というイメージと結びつけられているが、高天原から「祓」で浄化された後、一転して英雄的な性格を持つようになる。出雲でヤマタノオロチを退治し、王権を象徴するクサナギノタチを献上し、さらに出雲と葦原中国を王化したスサノオは、それ以前と大きく異なり穏やかな「善神」のイメージとなる。

なぜなら、高天原の八百万の神は天下のことを自分の務めとする。そのため、スサノオの「悪神」から「善神」への変身は、彼が高天原の神としての本性を顕す過程であると思われる。追放以前のスサノオは乱行を働き、無知で軽率な状態を顕した。この後、スサノオは高天原を追放されるにあたり、髯や爪という災厄を負うものを「祓」で体から切り離された。すなわち、罪を体から分離する儀礼である。これを経ることによって、スサノオは高天原的価値観によって浄化され、「私」を捨てて、三貴子の一員としての本性を顕して、高天原に従順な「善神」へと変身する。そして、高天原的意志の代表者、生成力の実践者、秩序を守る者、また王化の使者となっていく。

そして、自身の成長に伴い、スサノオの「生成力」と「死と再生」の転換を司る能力も向上していく。はじめの「アマテラスの岩屋戸隠れ」では、スサノオは「生成力」をまだ身につけていないため、「死」の部分にしか関与せずに、アマテラスは八百万の神々の助けのもとで再生したのである。続いて、「穀物起源」の場面では、「祓」を経たスサノオは「生成力」をはじめて発揮し、高天原が担っている「生成力」を実践する生産者となった。それと同時に、一人で「死と再生」の転換を司るようになる。次に、出雲に降ったスサノオはヤマタノオロチを「死」なせ、王権を象徴する太刀として「再生」させる。さらに、無秩序で穢れに満ちた出雲を高天原的な秩序ある世界へと王化した。その時のスサノオは、高天原的秩序を守る者であるだけでなく、地上世界を王化する使者でもある。最後に、オオナムチをオオクニヌシに成長させる過程では、スサノオは「国の主」を育成し、葦原中国を王化しただけでなく、高天原的秩序と

意志に従う王化継承者の成育者になった。

終わりに

全編を通して論じてきたように、『古事記』において、「二重性格」を持っているスサノオは自身の「死と再生」を経験せず、スサノオは不可欠重要な転換装置として、「死と再生」の転換過程において、「穀物起源の神話」をはじめ、様々な場面で大きな力を発揮し、『古事記』における唯一「死と再生」の転換を司る能力を備えている神なのである。そして、その能力はスサノオの自身の成長あるいは神知の開化に伴い、向上していく。スサノオは農耕社会の破壊者、神を殺したという悪神から、高天原が担っている「生成力」を実践する生産者と高天原的秩序を守る者になり、のみならず、地上世界を王化する使者、さらに高天原的秩序と意志に従う王化継承者の成育者になった。